

2022年6月9日(木)

スタンディングオベーションの後で

昨日は、芸術鑑賞教室で浜松町のJR東日本四季劇場[春]に出かけ、『アナと雪の女王』を観劇しました。新型コロナウイルス感染症拡大が落ち着きを取り戻したお陰で、本校全生徒と教員をして745名を含め、約1500席の会場は全席満席でした。今回の出演は、エルサに岡本 瑞恵さん、アナに町島 智子さん、クリストフに北村 優さん、そしてオラフに小林 英恵さんという面々でした。

劇団四季によるこの作品は、そもそも2020年9月に JR 東日本四季劇場[春]のオープニング作品として開幕予定でしたが、コロナ禍による海外スタッフ来日の目処が立たず半年延期されたもので、また途中で出演者の感染で公演中止になったりしましたが、どうか今年12月の終演まで無事でありますようお願いしています。

さて、物語の舞台は北欧、「地理」の授業で習ったフィヨルドを背景に台詞や舞台は北欧文化の象徴的なものいくつか登場します。最初にステージに登場したのは特徴的な形をした夏至祭を飾るメイポール。そして、脇役ながら物語をリードする雪だるまのオラフ。Olaf とはノルウェーによくある名前の一つで、995-1030年に在位したノルウェー王、守護聖人に由来しています。そしてクリストフの相棒のトナカイ。その名はスヴェン Sven。角が生えていますからモデルは雄。トナカイを漢字で書けば「馴鹿」、因みにユーラシア大陸には野生のトナカイはいないそうです。劇場を後にした時、先生方の中でトナカイを演じているのは1人なのか、2人なのだろうか、道すがら話題になりました。皆さんはどう思いますか？何よりも言葉として大事なキーワードはヒュッゲ hygge です。デンマーク語で「居心地がいい空間」や「楽しい時間」のことをさす言葉で、物語ではサウナを舞台に歌に踊りにと多用されていました。

作品は休憩時間を含めて2時間 25分と、やや短めですが、ディズニーの映画版に比べ、冒頭の幼児期が短くされている一方で、キャラクターの心情が深く描かれ、情感的な仕上がりになっていると思います。また、舞台はプロジェクションマッピングに、LED やスワロフスキーを多用したきらびやかな背景になっており、幕間直前の岡本さん演じるエルサの歌は、さすがとしか言いようがありません。また、その情感を豊かに支えているのが、東京外国語大学(ロシア語学科)卒業生の高橋 知伽江さんの巧みな訳詞にあるとも言えるでしょう。

続いて2幕の幕が上がると、オーケンの雑貨屋。隣にはヒュッゲを象徴するサウナがあり、サウナには欠かせない白樺の枝ヴィヒタを持った男女が楽しく歌い踊ります。そして、一気に雪の国へ…。ただ「地理」学的に解せないのは、北欧には三角形の頂きを持った山々がないことですか。しかし、これも演出。

畳みかけるような物語展開に続き、フィナーレ。アンコールの幕が上がると、こちらもコロナ禍で封印されていたスタンディングオベーションが「解禁」され、ほぼ総立ちで賛辞とエールを送りました。やはり、感動を与えることこそ大切なのだと感じた次第です。キャスト、スタッフおよび関係者の皆様、ありがとうございました。

校長 石飛 一吉